

史鉄生作品における二つの鐘の音 ——「廟の思い出」を中心に

輪田 直子*

The Two Rings of Bells on Shi Tiesheng's Literary Works : With a Focus on *The Memories of Mausoleums*

Naoko WADA*

*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki, Japan

はじめに

幼い頃の記憶がいくつになっても消えることなく留まり続け、やがて自身の中で醸成されあるいは書きかえが行われ印象へと変化した後、人生のある瞬間に思いがけない形で立ちあらわれ、影響を与える。史鉄生（1951—2010）の作品には、そのような人が記憶や印象と向き合う際の息詰まるような、息をのむような瞬間、そしてそこから現在の自己を形成するに至った思考の流れが丹念に描かれる。その問題意識が常に自己の内面との対話にあり、「個人＝言葉と魂」の探求にあった彼の作品⁽¹⁾は、激流の中で社会が爆発的に変化し続ける現代中国にあっても深い共感を呼んでいる⁽²⁾。

史鉄生の作品については、小説と散文（随筆）のいずれに分類すべきか、作家本人も決して明確な基準は設けていなかったように見受けられる⁽³⁾。初期の代表作として一般的には小説に分類される『わが遙かなる清平湾（我的遙遠的清平湾）』（1983）では、史鉄生が陝西省延川県関家荘に「挿隊」した経験が、また『お婆さんの星（奶奶的星星）』（1984）では、地主の妻であったという出身のために「黒五類」として身を屈して生きながらも、いつの日か名誉の回復される日を待ち望む祖母と、彼女に育てられた史鉄生の思いが描かれるなど、作者の現実の生活を色濃く反映した内容となっている。一方、散文『ねむのき（合歡樹）』（1985）、『わたしと地壇（我与地壇）』（1991）などの作品では、「挿隊」の中で下半身が麻痺し、車椅子での生活を余儀なくされる絶望の中でもがき苦しむ史鉄生が、自分を氣遣い亡くなっていっ

た母への深い悔恨を抱えながら、自宅からほど近い胡同や地壇など自分に許された限られた空間での長い年月を経て、やがて「生きるために書く」作家として出発する姿が描かれているが、そこで描かれる出会いのエピソードや生命に関する考察は、決して現実の生活にのみ立脚したものではないことを感じさせる。

このように史鉄生の作品においては、過去の経験が時にはいくばくかの虚構を纏った小説という形で、時にはより率直な散文の形を取って、いくども丹念にあらゆる視点から掘り下げられる。その小説と散文のあわいに位置する独自のスタイルを特徴付けるのが、散文集『記憶と印象（記憶与印象）』⁽⁴⁾に結実する「人や場所やそれらをめぐる事柄の記憶をたどりながら、それらが内包する情緒（たとえば恐れや願いや祈り）をすくいとる」⁽⁵⁾という一つの手法であり、史鉄生自身はその手法を選択するに至った経緯について「過ぎし日々について私が書くことができるのは、私の記憶と印象だけだ。私は史実をたどろうとは思わない。どこまでたどったらついに史実にたどりつけるのか、私は知らない——たどってみたところで、それらはすべて記憶と印象にほかならないのではないか」（『記憶と印象』前言）と述懐している。すなわち、過去の経験を文章化する際に重視されるのはいつ、どこで、誰がといった具体的で正確な情報＝「史実」ではなく、史鉄生という個人の視覚、聴覚など五感によって保存された「記憶」が、彼の中で年月を経て醸成され作り出された「印象」であると言えよう⁽⁶⁾。

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

史鉄生における「記憶」をたどりその「印象」を文章に紡いでいく方法については、栗山千香子氏に詳細な論考があるが⁽⁷⁾、史鉄生の作品中、いくども取り上げられる印象のモチーフの一つに教会の「鐘の音（原文：鐘声）」がある。私という命はどこから来て、どこへ行くのか、という生命の不思議を常に問い続けてきた史鉄生にとって、数ある印象のモチーフの中でこの問いと最も深く結びつくものの一つがこの「鐘の音」であると考えられる。小論では、史鉄生の諸作品における「鐘の音」の叙述について検討する上で、『記憶と印象』の中的一篇である「廟の思い出」で描かれる「廟の“鐘の音”」との比較を中心に置き、その意味するところと変遷を追ってみたいと思う。

1. 史鉄生と「鐘の音」

史鉄生にとって「鐘の音」に関する最も重要な経験として多くの作品で繰り返し言及されているのが、自身が生まれて初めて聞いた音として認識されている教会の「鐘の音」である。2001年発表、後に『記憶と印象』としてまとめられる作品中には、その光景が以下のように描かれる⁽⁸⁾。

私はおぼつかない足どりで戸口を出て、中庭に立った。一つの現実の世界がようやくその証を示し始めた。（中略）空の上、あるいは雲のなかで、何か音がする。どこから聞こえて来るのかわからないほどかすかな音——風の音？鈴の音？それとも歌声？はっきりとはわからない。それがいったい何の音なのか、その後もずっとわからなかった。だが、あの青空の下の中庭に出るたびにその音を耳にした。おくるみの中にいたときからすでに聞いていたに違いない。澄みきって、明るく、抑揚があり、速くも遅くもなく、あたかも生命そのものの呼び声のようであり、耳にした者に注意を払い、探し求め、訪れ、さらには身をゆだねるよう迫るような音だった。

（「そっと去る」と「そっと来る」）
そのとき、夕刻の祈りの鐘が鳴り響いた。あっ、この音、この音だ！これこそ、私が聞いた、空にゆらめくように響いていたあの音だ！「あれはどこ？おばあちゃん」「えっ？何だい？」「この音だよ、おばあちゃん。この音、聞いたこと

があるんだ」「鐘の音かい？ああ、あの鐘楼のところがった屋根の下で鳴っているんだよ」このとき私ははじめて知った。私がこの世にやって来て最初に聞いたあの音は、この教会の鐘の音、あの尖塔から響いてきた音だったのだ。

（「消えた鐘の音」）

1984年発表の『お婆さんの星』⁽⁹⁾では、その音が何であったのか明かされていない。

この世がわたしに与えた最初の記憶は、お婆さんの懷に横たわって、ひたすら泣き、じたばたしながら、なぜともなく泣くほどに悲しくなったことだ。（中略）お婆さんがわたしを抱きしめて、軽くたたきながら、「ネン、ネン——」と口ずさんでいる。（中略）泣きやんで、ぼんやりと聞くわたしの耳に、妙なる音がゆらゆらと、ゆるやかに聞こえてくる。……鳩笛の音？秋風？落ち葉が軒端をはらう音？それとも、ただお婆さんがそっと口ずさんでいるだけなのだろうか？いまもってわたしには定かでない。

この音が『記憶と印象』における「鐘の音」を指している可能性は非常に高いと考えられるが、作者は作品の主題（祖母に対する懐旧、悔恨の情）を考慮して敢えてそこに踏み込まなかったのか、それとも当時にあったのは事実「鐘の音」が想定されていなかったのか（もしそうだとするならば、「消えた鐘の音」の情景はフィクションということになるが）判断はつかないものの、その印象が「妙なる」ものであった点は重要であろう。その6年後に発表した『鐘声』⁽¹⁰⁾では、この世で初めて認識した音としての「鐘の音」が登場する。

2. 『鐘声』における「鐘の音」

史鉄生の作品について「鐘の音」を論ずる際に、1990年に発表された小説『鐘声』は真っ先に取り上げるべき課題であろう⁽¹¹⁾。『鐘声』は、Bが少年時代の数年間の物語を、何年も経ったある日の午後に「私」と再会し語り、その再会の出来事を後に「私」が語る、という構成をとる。Bが一歳になる前に両親は大陸を離れ、祖父の希望でBは祖父のもとに残され、五歳まで小さな農村で過ごす。Bにとってこの村で最も強い印象として残っているのは見渡す限りのヒマワリ畑であるが、その後学校に通うために、延々と続くヒマワリ畑を

抜け、叔父と叔母の住む都会に移り住む。両親の行方を祖父に教えてもらえないBは、叔父と叔母に尋ねるものの答えは得られない。叔父は教会の牧師であったが、新中国の理想社会実現に情熱を傾け、やがて教会を去る。閉鎖された教会にBは忍びこみ、両親を思いながら鐘を鳴らす。しかし、ほどなく鉄を作るという名目で鐘は持ち去られてしまう。結局、父母の行方はわからないままだった。一方、この都市で生まれ育ったBより年下の「私」は、当時Bとは顔見知りではなかったが、この教会の鐘の音は記憶しているとBに話す。

作品中に明言されてはいないが、「鉄を作る」という出来事は大躍進を連想させるに十分であるし、舞台が新中国の成立直後であり、Bの両親が大陸を去った後に向かったのは台湾であったという想像も可能である。残された家族にとって彼らが禁忌の存在であったこともうかがわれる。しかし、これらの枠組みはそれ以上解明させることはできない。

以下、『鐘声』における「鐘の音」の叙述について検討していく。

2.1 『鐘声』の「鐘の音」

作品中、最初に「鐘の音」が登場するのは、「私」がBとの会話の中で、Bの叔母宅のすぐそばにあった教会について覚えているかと問われたことに始まる。「私」は、今では消えた教会については「話に聞いたことがあるだけ」であるが、「鐘の音」は覚えていると答える。「私」はそれを「ぼんやりと覚えて」いるだけだが、後に「それは鐘の音だったに違いないと確信」している。「私」は「鐘の音」について、「今でもその音を思い出すと心が落ちつく」と述べ、一方、Bは「朝に聞けば朝の音だと感じたし、午後に聞けば午後の音だと感じたし、夕方に聞けば夕方にしかない音だと感じた」「不思議な音」であったという印象を語る。「私」はBの話聞いたことによって、記憶の中にある「鐘の音」は自分がまだ生まれて間もない頃に、「おくるみの中」で聞いた「生命のはじめの音」であったように感じ、その音は「天井、窓、窓の外の木、そして祖母のやさしい顔」などの光景を伴って思い出される。

農村で育ったBはこの都会に来て初めて教会

の「鐘の音」を聞いている。初めて聞いた「鐘の音」の印象は、叔父が壁に並んだ書棚を背景に椅子に腰掛けた光景とともにあり、折しも響いてきた「鐘の音」はこの光景を「古典派の肖像」のように印象づける。

Bは幼い頃から育ててくれた祖父や、「懐はとても暖かく、初秋のヒマワリ畑で感じる風のように」で「体はBが嗅いだことのない匂いがし」たために「いくらかの憧れと狼狽を感じ」た叔母に対して肉親としての情を感じるが、両親の行方という大問題についてはその答えを得られないことを感じている。しかし、叔父については「嘘をつけない人間」であることを五歳にして直感で感じとる。その後Bは、幼いとき達が目を覚まして遊び相手になってくれることを期待する寂しい昼間や、叔母が小学校の先生に、Bが幼い頃に両親が亡くなったと話すのを聞いたために、ヒマワリが次々と切り倒される恐ろしい夢から目覚めた朝などに「鐘の音」を聞く。両親は亡くなったのかと問うBに対して、言葉を繕う祖父や叔母に対して怒りを表す叔父の表情から、両親は死んでいないとBが確信した朝の「鐘の音」は、昼間の寂しい「鐘の音」とは異なる音色であったはずである。Bは両親の消息を訊ねるため、祖父や叔母に内緒で、一人で「鐘の音」を頼りに教会に叔父を訪ねるが、Bが教会に到着すると「鐘の音」が止み、叔父は教会を去る決意を興奮した様子で語っていたため、Bは機会を逸する。叔父が去った後閉鎖された教会に、Bは一人で遊びに行き、鐘楼に登り鐘を鳴らす。その鐘を鳴らした時の心の動きと、そのことによって起こる事件は以下の通りである。

Bは鐘楼によじ登り、あちこちに錆が浮き出た大きな鐘を木の棒で打ち鳴らした。だが残念なことに、Bの力はまだ弱すぎた。しかし、その風が鳴らしたような微かな鐘の音は、意外にも暖かさと愁いを帯びて雪に覆われた何もない庭に反響し、寒々とした陽光の中に広がって、遙かな大空へと吸い込まれていった。父さんと母さんは決して死んではいない、ただ遠いところにいるだけなんだ、とBは既に確信していた。しかし、ならばなぜ帰って来られないのか、それがわからなかった。Bはこんな気持ちが募ってくるといつも決まってこっそり教会に行き、

願いを込めて鐘を鳴らすのだった。この事は、付近の住民に大きな疑念を抱かせ、ほどなくして身の毛もよだつような様々なデマがあちこちで流れた。冬の終わりに大勢の人がやって来て、その大きな鐘を下ろしトラックに載せて運んで行った。鉄を作るためということだった。Bは友を失ったかのように気落ちし、その後しばらくあの庭には行かなかった。

両親の消息を聞き出せるかも知れないとの希望を抱かせた叔父が教会を去り、叔父を夢中にさせる理想の社会がBの切実な両親への思いを薄めさせ、すくい取ってくれないことをBは感じる。Bにとって「鐘の音」は叔父の存在と強く結びついた印象であったと思われ、叔父への希望を諦めた時、その希望の残り香であるような鐘を鳴らしに行く。しかし、「鐘の音」は弱々しいながらも遙かな大空へ届き、吸い込まれていく。その「鐘の音」は、いつか会いたいと願う両親に向けたBの便りである。しかし、鐘はなくなる。鐘がなくなった後、教会からは斧を振るうような音が聞こえるようになり、なぜか大人たちが無関心を装ううちに教会は戸や窓などが失われ、やがて轟音を立てて崩れ落ちる。その跡にはヒマワリがぎっしりと茂った。「私」は当時囁かれていた、「豪雨の中で教会が崩れ落ち」てからヒマワリが生えてきたという噂をBに聞かせるが、Bはそれを否定する。「その雨が降る前に俺は一人であの庭にいた。信じるかい？教会が轟音をたてて崩れ落ちた後で、大雨が降ってきたんだ」。そして、ヒマワリは祖父がまいたのだらうと推測して小説は終わる。

2.2 「鐘の音」とヒマワリ

五歳まで住んでいた農村で見渡す限り広がるヒマワリ畑に対してBが抱く印象は、ある種の恐れを含んでいる。「天候が崩れるとすべての花が一斉に狂ったようにぎわめき出し、その音が山野を駆け巡って反響するので、ヒマワリを植えた人でさえ眩暈と恐怖を覚え、村中がどうしてよいかわからぬほどおびえてしまうのだった。」また、Bは「一面のヒマワリが次々と切り倒されていく時、ふいに涙がこみ上げてきて止まらなくなった」理由はよくわからないものの、「生命の中にはほとほと不思議なことがたくさんある」と「私」に話

す。都会に移ってから夢に切り倒されたヒマワリの光景を見るのは、両親が死んだという話を聞いた夜である。初めて死というものにふれ、祖父との別れや死を連想し、恐れ苦しむ。Bはその慕わしい祖父が、教会が崩れた後にヒマワリを植えたこと確信していた述懐を「私」にもらす。それはなぜか。故郷の農村を出る際に、長いトンネルともいべきヒマワリ畑を抜けて都会へやって来たBはようやく両親の手がかりに近づき、そこで「鐘の音」とともに日を送る。しかし、教会と鐘が消失し、そこは再びヒマワリに覆われてしまう。ヒマワリが教会の痕跡を消すかのように茂ったのは明らかである。そこには、最も身近な存在である祖父が、一方では自分と両親を隔てる存在でもあったという苦い思いを読み取ることが可能であろう。ヒマワリ畑はBにとって「燦然と輝いて村を明るくのどかに照らし出す」印象を与えてくれる存在から、両親や祖父、叔父との記憶を経て、自分と過去を隔てる印象として定着していったのではないかと考えられる。

一方、「私」の「鐘の音」について語られる内容は、1章で確認した作者・史鉄生自身の「鐘の音」にまつわる経験と記憶・印象が投影されている。「私」はBの話聞きながら、自身の「鐘の音」にまつわる記憶をたぐり寄せる。

私にはそれは、おくるみの中で目覚めた時に聞こえた音、ぱっと広がった一面の光とほんやりした光景（天井、窓、窓の外の木、そして祖母のやさしい顔）が伴っていた音、生命のはじめの音、に感じられた。

1章の「消えた鐘の音」で挙げた部分では、それが鐘の音だったと「知った」と確信しているのに対し、この部分ではまだ「感じられた」と話すに止まるものの、生命の始まりに「鐘の音」が光や祖母のやさしい顔とともに、「私」を歓迎する喜ばしい印象としてとらえられていることがわかる⁽¹²⁾。それは、Bにとっての「鐘の音」が恐れや悲しみを伴う印象を残していることとあまりにも対照的である。同じ時に同じ「鐘の音」を聞いていたかも知れない二人は、全く異なる印象を持って生きてきたのである。さらに「これは何年も経ってからBが私に話したことだ」「幾世代にもわたって伝えられてきた物語を聞いているよう

だった」としつこいほどに繰り返される「私」の語りによって、Bの物語が「私」にとっては遥かに遠い物語であることが印象づけられる。ただし、その二人の物語は栗山氏が指摘するように、二人が再会することによって生まれ、作り上げられた物語なのである⁽¹³⁾。

『鐘声』における「鐘の音」は、Bの恐れや不安、悲しみと、「私」の懐旧や憧憬、慕わしさという対極的な印象を乗せて響き合う。二人の物語のさまざまな局面で響く「鐘の音」が、作品の空間に広がりを持たせ、またその時間を重層的に織りなしている。

3. 『病隙碎筆』における「鐘の音」

次に、『記憶と印象』と時期的に重なる1999年から2001年にかけて発表された随筆『病隙碎筆』⁽¹⁴⁾において、「鐘の音」に触れられている二箇所についてまとめておく。

最初の箇所は、『病隙碎筆2』第43節。自分という存在はどこから来て、どこへ行くのかという、史鉄生が常に考え続ける問題の中で、彼は絶対的な「無」を否定し、「私」の「原在＝原存在」、すなわち「神＝最初存在」を想定する。なお、この「神」という存在については、「宗教信仰そのものではなく、本質主義的な問いの連続の彼方にある、魂の「闇夜」を上方から凝視する眼差しを指している」という見解が妥当であろう⁽¹⁵⁾。

私は絶えずその「最初存在」を眺めている——それは空であり、小さな通りであり、陽光の中に微かに聞こえる鐘の音であり、恐れと好奇の中で無限に広がっていく。だから私はその後ろ姿を見ながら、その心が何度でも闇夜に入っていくのを見るのだ。死もまた終わりではないのだ。彼が見守っていることを示すのはただ一言、「見えないものを信じられる人は幸せである。」

「私」はこの世で感じるさまざまなもののその背後に、自分がやってきた場所、自分の元の魂があると見ている。「私」にそのような存在を感じさせる代表的な現象として、「鐘の音」も挙げられている。

二箇所目は『病隙碎筆5』第39～40節。

魂は強大かつ強靱で、勝敗とは無関係だ。魂は

ゴッホの天空や原野のように燃焼し、高潮し、古い夢を揺り動かす。あらゆる現実が魂の前では小心翼翼として、生命についての解釈に耳を傾ける。だから私は「ヒマワリ」の後ろにいつも死に赴く人を目にし、また「松の木のある山の斜面」⁽¹⁶⁾の中に太古からこだまする鐘の音を耳にするのだ。

そのこだまする鐘の音こそが、魂の不撓不屈の足どりであり、ある肉体を離れても、またどこかで何度でも人間世界に降りてきて、無数の肉体を借りてとこしえに伝わっていく。生命の情報はこうやって永遠に消えることはなく、永遠に終わることはない。たとえ科学が発展し——例えばクローン、遺伝子、ナノ——世界の形、道具、背景、果ては人の肉体までが変わったとしても、生命の情報はこの鐘の音のように、この鐘の音の前に広がる荒野での呼び声のように、あるいはその呼び声の上を吹く空の風のように、肉体が減びても決していささかたりとも衰えたり、かたときたりとも停止することはない。

一つの肉体が減びても魂は何度でも人間世界に降りてくるとする史鉄生は、ゴッホの絵画をそのような強靱な魂に喩える。「ヒマワリ」の絵には、肉体の死によりもといた場所へと向かっていく魂の姿を見出し、そして教会や松（あるいはイトスギ）の絵の中に、太古から鳴り続ける「鐘の音」を聞く。

ヒマワリと「鐘の音」に対する史鉄生の印象が、ゴッホの絵画という具体と結びついていることが注目に値するが、『鐘声』の約10年後に発表されたこの文章が『鐘声』におけるヒマワリと「鐘の音」の象徴性を説明したものであるのか、あるいは、『鐘声』執筆時にすでにゴッホの絵画が念頭にあったのかはわからない。しかし、「鐘の音」という言葉が、人間世界ではないところからやって来ては戻っていく魂の足音であり、史鉄生が「鐘の音」を耳にするということが、そのような世界に思いを致す象徴的な表現であることが『病隙碎筆』からは見て取れる。

4. 「廟の思い出」と「鐘の音」

ここまで史鉄生作品における教会の「鐘の音」

の描き方を分析してきた。次に、『記憶と印象』第1部第8編「廟の思い出」を取り上げ、“鐘の音”について検討してみたい。

この作品は「有閑廟的回憶」（後に「廟的回憶」に改題）のタイトルで『人民文学』1999年第10期に発表された。後に『記憶と印象』として出版される第1章9編のうち他の8編はすべて翌々年2001年『上海文学』第7期にまとめて発表されており、「廟の思い出」はその意味でも若干特殊な位置にあると言える。そして、この作品に見られる特徴が、教会ではなく、廟の“鐘の音”——つまり、音を奏でる器具は異なるものの、そこから聞こえてくる音にまつわる記憶と印象が中心に据えられているということになろう。以下、史鉄生の廟にまつわる物語を整理しつつ、“鐘の音”の描き方に検討を加えてみる。

4.1 7つの廟

「廟の思い出」は生まれてこの方、いつも身近に廟が存在していた作者が、時系列に沿ってその廟にまつわる記憶をたどった文章である。以下に、それぞれの廟の属性を簡単にまとめておく。

- a) 生家の四合院の斜め向かいにあった油屋は、かつては「小さな廟」であり、もとの廟の構造を残していた。
- b) そこから少し離れた場所にある、「少し大きな廟」。尼寺だったらしく、祖母とよく散歩した。
- c) 小学1年の時分に引っ越した先の「観音寺胡同」にある「小さくはない廟」。荒れ果てていて、子供たちにとっては秘密基地として格好の遊び場だった。ある日、突然工事が始まり「非鉄金属加工工場」が建設され、廟の全ては失われ胡同の名も変わってしまったため、そこが廟であったことをうかがわせる痕跡も失われている。
- d) 通った小学校は、柏林寺という「大廟」の一部だった。また、挿隊から戻った後に働いていた作業所も、柏林寺のそばにあった。
- e) 正規の仕事を探しに行った労働局も、もとはおそらく「廟」だったらしい。
- f) 柏林寺近くで働いていた1979年、二人の僧侶を目にし、文革中に迫害を受けた「廟」が復活するかもしれない、それは「浄土寺」かもしれないと友人と推測し、そこを一人訪れる。

- g) 1996年に訪ねた地球の裏側の国で見た、教会（廟）。そこで祈る中年女性の姿に、母を思い出す。

4.2 廟の“鐘の音”

これらa)からg)の7つの廟のうち、“鐘の音”について具体的に描かれるのはb)、d)、f)、g)である。

- b)は「松柏の木立がうっそう」とする尼寺で、尼僧が穏やかに俗人を迎え、線香の香りが充満し、法要が日常的に営まれている。

本堂の中ではよく法要が営まれ、鉦や太鼓、繞鈸、木魚の音がカンカン、ボクボクと響き、聞いているとどこか不安な気持ちになった。読経の声は歌詞のない音楽のようで、闇夜の嘆きのようでもあり、昼間灼かれた大地がようやく落ち着きを取り戻した後にみるみる立ち上る靄のようでもあった。

五〜六歳の「私」は法要の様子を一目見て、そこが「異なる場所であることを、あるいは異なる場所へとつながっている」ことを知り、恐れ、「祖母の懷に顔をうずめ、何も聞かず考えないようにした。ただあの世の気が立ち込め、月明かりまで冷たく暗くなったように感じた」。その強烈な印象は「すべての音、光、形、動き、さらには温度や空気に至るまで」あらゆるものに対して、「人の心の奥にはそれらに呼応するものが生まれながらにして備わって」いるからこそ生まれたのだろうと考え、音や光、形などが「雰囲気あるいは情緒」として「ひとかたまりになって迫ってきて、言葉よりも大きな力で、言葉の及ばない領域に入り込む。それを可能とするのが、「形式の力」であろうと考える。その「形式の力」を形成する一つに、法要の際に響く「鉦（原文：鐘）^{かね}」の音も数えられている。

d)では、柏林寺という大きな廟が舞台となる。「私」が通った小学校は柏林寺の廟の跡に建てられたもので、授業の開始と終わりに「鐘（原文：鈴）」が鳴る。それを鳴らしていたのがもと僧侶で守衛をしていた老人だった。子どもたちと親密につきあい、よく面倒をみていた老人の鳴らす“鐘の音”に、「私」は特別な思い入れを持つ。

授業の始まりあるいは終わりの時間になると、

老人は銅の鐘を鳴らしながら、落ち着いた歩みですべての廊下を回る。わき見をせず、ずっと姿勢も変えない。カランコロン、カランコロン、鐘の音は風に乗って響き、校庭を巡り、陽光の中へと消えていく。そして子どもたち全員の心の中に磨り減ることのない記憶を残した。鐘の音は、授業開始のときには鋭く鳴り、終了のときには伸びやかに鳴ったが、いずれにしても、のちのブザーに比べれば味わいがあり、実に感情豊かで、あたかも私たちの恐れや願いを知っているかのようだった。

しかし、老人は「なおもこっそり香を焚き仏を拝んでいたらしい」ことから、宗教の許されなかった時代にあって罷免される。「鐘の音」が聞こえなくなり、かわりに無機質なブザー音を耳にする中で、「私」は次のように考える。

かつての鐘の音はどこへ行ってしまったのだろう？ただ一つだけ確かなことは、それは記憶とともに未来へと運ばれたということだ。消え去って何年もしてから、夢の中で、私はよくその音を耳にした。細くなったり太くなったりする鐘の音を聞きながら、鐘を鳴らす老人の落ち着いた歩みを目にし、老人の変わらない表情の中で目覚めた。あの鐘の音には未来が埋め込まれていて、のちに起こることもはじめからわかっていたのではないだろうか？

b)では「異なる場所へとつながっている」音として恐れ、d)では「私たちの恐れや願いを知っている」音として慕い、しかしそのいずれもが「私」の目の前から一度は消え、そして再び出会うべく「磨り減ることのない記憶」として未来へと運ばれている。

4.3 聞こえない“鐘の音”

f)は、d)の柏林寺のすぐ外にあった作業所で「私」が働いていた時に二人の僧侶を見かけたことで、復活するのではないかと仲間と推測した浄土寺について。この場面では、実際には「私」は“鐘の音”を聞いていない。「聞こえない」ということと、その聞こえない「音楽」を懐かしむ心情が語られる。

「柏林寺が復活するのだろうか？」(中略)「たぶん北の浄土寺だ。あそこの建物、前から直して

いたから」(中略)みんなぼんやりと北のほうを眺めた。耳をすましたが、特別な音は何も伝わってこなかった。そのときはじめて私は気づいた。——廟が消えてしまってもう何年にもなるのだ。消えてしまった。あるいは閉ざされてしまった。遠く眺めることができたあの異なる場所とともに。私の印象の中では、その瞬間に、一つの時代が終わりを告げた。

夕方、私は一人で車椅子をこいでその小さな廟を訪ねた。(中略)廟の形式が懐かしく思えた。私を不安な気持ちにさせるあの音楽を心から懐かしいと思った。もしかしたら、あのような不安な気持ちが、私のもうあまり若くない生命についに符合したのかもしれない。だが実は、私はあのような音楽がそれほど好きではない。あの音楽を思い出すと、今でも圧迫や恐怖を感じ、背筋が寒くなる。しかし、私が歩んできた歳月とともに、生命を振り返り眺めずにはいられないし、その音楽の圧迫の中で異なる存在の声に耳を傾けずにはいられない。私はあの音楽が決して好きではない。たとえば生と同じように死を好きにはなれないように。しかし、それはなくてはならないものだ。

幼い「私」をあれほど怯えさせた「私を不安な気持ちにさせるあの音楽」と「あの異なる場所」について、自身は避けたくとも避けがたい幾つもの経験を経てきたという確かな実感が、「決して好きではない」が「なくてはならないものだ」と言わしめている。

その上で、b)でも引用したように、人間には生まれ持って様々な現象に呼応するものが埋め込まれているが、「(この生まれつき愚かな子どもである)私」にあってはそれが悲観的、否定的な見方に結びついてしまうとして、極楽の地の存在を信じるができないと言う。

心が淀んだどぶのようだったら、それでも何かを願うことなどできるだろうか？さらにどこへ行こうと、その地が完全ではないことを知るだけだ。醜く弱い人間と、完全な神との間にあるのは、信ずる者の永遠の道なのだ。こうして私は耳にした。不安な気持ちにさせるあの音楽は、あることを伝えているのだと——この世には永遠に欠陥がある。そうでなければあの世は

すぐさま崩れてしまう。

復活する可能性はあるものの、少なくともこの時点で失われていた“鐘の音”は、この完全ではない世に生きる人間が避けることのできない行く先を告げていたのだと「私」は気づき、それを圧迫や恐怖とともに受け入れる覚悟を持って懐かしく思ったのである。

ところで、浄土寺の“鐘の音”について補足すると、1988年発表の『原罪・宿命』『原罪』編⁽¹⁷⁾に浄土寺が登場する。「原罪」は、「私」と同じ通りに住んでいた十叔という男についての話であるが、その通りに浄土寺があったことになっている。「私」が子どもの頃の十叔に関する記憶を語る際、この話が本当のことかどうか保証はできない（当事者であった祖母はすでに亡く、友人たちとは今はもう会えないため）と断ることにより、物語の解釈を読者に委ねる叙述方法が採られているが、それは『鐘声』の構成にもつながると言える。十叔は障害のため首から下の機能を失っているが、子どもたちは十叔の話す「神話」に引き込まれ毎日遊びに行く。その話を聞いているときに、浄土寺で営まれる法要の“鐘の音”や読経の声が聞こえてくる場面が何度も挿入される。

例えば、十叔は近所に住むというある超人的な男の「神話」を語る。男は誰よりも背が高く、地球上のどんな場所へも行ける。そして歌が上手く、『魔王』の一節を歌っている——十叔はその男に自らを仮託しているようである。ある時、子どもたちは十叔を手製の手押し車に載せて、彼の話す不思議な白いビルの一室を実際に見に出かける。ところが、その途上で『魔王』の歌を歌う男に出会う。まさかこの男が例の超人的な男なのかと色めき立つ子供たちだが、その男は背が低く痩せて、目が見えなかった。十叔は彼は例の男ではないと否定する。しばらく呆然と皆が座り込むうちに、空に星が輝き出す。その時、彼らの耳に浄土寺の“鐘の音”が聞こえてくる。

浄土寺ではこの夜も法要があり、鉦や太鼓や読経の音が空にも地にもゴーンゴーンと重く響き渡り、星たちのダンスの伴奏をしていた。

“鐘の音”は、夜の闇の中の子どもたちと十叔の失望や不安の表現であり、また、またたく星のダンスの伴奏ととらえることで、“鐘の音”がこの地

を離れ遠い世界とつながっていることも表現しているように思われる。このような“鐘の音”の描き方は、「廟の思い出」でのb)の尼寺で幼い史鉄生が感じた感覚と、同じ方向性を示していると考えられる。

また、「原罪」の浄土寺には尼僧が二人いて、「私」たちとすれ違うと笑顔を向ける。f)で浄土寺を訪ねるきっかけになったのは二人の僧侶であり、さらにこの描写は、先に挙げたb)の尼寺を連想させる。「廟の思い出」ではこの尼寺の名前は忘れてしまったとされており、「私」はそのb)の尼寺も含め、懐かしい「廟の形式」に触れるために浄土寺を訪れているが、その時には聞こえなかった“鐘の音”が、「原罪」では鳴り響いている。それは浄土寺の、また幼い頃に通った尼寺の消えてしまった“鐘の音”が、かつて確かに響いていた情景であろう。

「廟の思い出」を先に読み進めると、その後、文革の終結とともに、「廟が消えていた時代は終わり」、「別の時代が訪れた。賑やかに」。廟が修復され観光地化していくその賑やかさは、「私」にとっては「不安にさせる音楽」よりもさらに違和感を感じさせる。

人々がそこへ行くのは多くは観光のためであり、(中略)栄達や長寿や安全や金運を願う……この世が辛くても来世で願いがかなうようにと、要するに全面的な優待を仏に祈り託すのだ。廟は何年も消えていたが、戻ってきたときにはもはやきわめて現実的な場所になってしまった。不安な気持ちにさせるものはもうない。

「私」にとって恐ろしくも懐かしく、幼い頃からこの世とあの世を結びつける場所である廟、音である“鐘の音”が失われたこと、また、避けることのできない恐ろしさを気楽に免除してもらおうとする人々への皮肉な述懐である。

4.4 教会の「鐘の音」との再会

g)は、廟とその「音楽」を失ってしまったf)の「私」にとって思いがけない再会を描く。1996年、「私」は妻と二人で「地球の向こう側の美しい都市」を訪れ、教会の「鐘の音」を耳にする。史鉄生は「教会（廟）」とわざわざ断りを入れる。

その都市には教会がたくさんあり、澄んだ陽光

の中に響き渡る鐘の音がいつも聞こえていた。その鐘の音は、小さいころ私の家の近くに教会があったことを思い出させた。そのとき中庭に立っていた私はせいぜい二歳、虚無の中から目を開けたばかりで、外の世界をまだ知らないうちに、その音を聞いた。澄みきって、伸びやかで、穏やかで、天から響いてくるようだった。この鐘の音はあの鐘の音なのだろうか？もちろん、両者の間には八千キロメートルの距離と四十数年間の時間の隔たりがあることはわかっている。

廟の“鐘の音”を含む音楽に対しては「不安な気持ちにさせる」もので「決して好きではない」ものの、異なる世界へ誘う「なくてはならないもの」として懐かしさも感じるが、一方、教会の「鐘の音」に対しては二歳の頃の記憶への無条件の慕わしさがあふれ出て、遠い異国の地で聞こえる「鐘の音」の背景は「澄んだ陽光の中」と明るい。

この風景は、1章で挙げた「消えた鐘の音」で再度（単行本の構成に従えばこちらが先に登場するのだが）描かれる。「鐘の音」に耳を傾けた「私」は「一瞬にして幼年時代に戻ったような、世界全体が幼年時代に戻ったような」感覚から、故郷を想起する。

故郷というものについて、私の中で突然新しい理解が生まれた。故郷は、ある特定の土地にとどまらない。それはこの上なくのびやかな心情なのであり、空間や時間の制限を受けることはない。そして、そのような心情が喚起されたとき、人はすでに故郷に帰っているのだ。

この発想は、『記憶と印象』第2部最終編「地壇を想う」⁽¹⁸⁾の主旨に合致する。「地壇」が人生に絶望し長く苦悩の日々を送った史鉄生を受け入れ、作家として立つ決意をもたらしした場所であることは自身の多くの作品で言及されてきたが、「地壇を想う」では車椅子に座る自分を「私」が客観的に観察し、その死までも見つめようとした末にたどり着いたのが「書くこと」であった、その思考の軌跡をたどる。そしてその「書くこと」という道について、R・バルトの『零度のエクリチュール』を引き合いに出し、「エクリチュール（書くこと）が最終的に求めるものはすなわち魂の最初の眺望」、つまり「零度」であり、「地壇を想うのは、

すなわち絶えず零度を振り返ること」なのでであると定義する。常に地壇の近くに住まいしていた彼は今では遠いところに転居し、地壇も静けさを与えてくれた当時とは様相を一変させてしまっている。

それならもう地壇に行って静けさを探す必要はなく、静けさの中で地壇を探したほうがいいと思った。ちょうど莊子が夢に胡蝶を見たように。当時、地壇で歳月を無為に過ごしていたころ、私は幾度となく疑ったものだ——私は地壇の中にいるのだろうか、それとも地壇が私の中にあるのだろうか？今私には虚空の中にも一本の境界線が見える。想うことによってそれを越えれば、それを越えさえすれば、清らかな風が顔に吹き寄せてくる。私はもう地壇の中にいない。地壇が私の中にある。

自分自身の中に「地壇」を持ち、「故郷」を持つ。すなわち「地壇」や「故郷」を、自分が行きたい時に、自分が行くべき時にいつでも行くことができる場所とすることができた。それは、史鉄生が「書くこと」「生きること」を粘り強く続けていく上でついに獲得した境地である。一方、故郷を遠く離れた場所で「鐘の音」を聞くことによって、自分の中に確かに故郷は存在しているということを再確認したように、その境地へと自らを向かわせる存在の一つが教会の「鐘の音」であると言える。教会の「鐘の音」は、史鉄生が苦しみを自らの内に引き受け、生き、書いてきた中で、「この上なくのびやかな心情」を喚起し、故郷へといざなういわば福音なのであろう。

4.5 教会の「鐘の音」と廟の“鐘の音”

ところが「廟の思い出」では、この教会の「鐘の音」との再会が、生まれて初めて認識した音としての「鐘の音」の記憶を手繰り寄せて終わることではなく、その後の一つの出会いが描かれる。「私」は異国の教会で、ある中年女性が周囲の喧噪をよそにキリストを見つめる姿を目にし、その瞬間に自身の母を想起する。

史鉄生が車椅子の生活を送るようになってからの苦悩と、それを見守っていた母に対する悔恨の思いをいくつもの作品で描いたことについてははじめにふれたが、母に対する最も強い思いは「母

が死んだ後、母の辛い運命と、強い意志と少しも押しつけがましくなかった愛情が、時とともに、わたしの記憶の中でますます鮮明になり身に沁みしてきた」⁽¹⁹⁾という言葉に代表される、母の思いに気づかず、応えられなかった自責の念であり、罪悪感である。

「廟の思い出」でもこの最後の場面の前に、すでに e) で母の思い出が語られている。正規の仕事を探すため労務局（もとは廟だった）を訪れるもすげなく扱われ、「私」は自尊心から二度とは行くことはなかったが、母は何度でも「申請」という名の「謝罪」をしに行く。そのような母に対して取った態度を、「私」は自らを「不機嫌な息子」と呼んで後悔をにじませる。そして、この g) の最後に至って「私」は、ある夢にずっと悩み苦しんできたことを告白する。それは、母が死んだのではなく、「ただ深く失望したのだ。私に、あるいは特にこの世界に。（中略）だから去って行ったのだ」と思い込む夢である。つまり、母が「私」に対する執着を捨て去ったのではないかという恐れのために、教会で見かけた何ものにも揺らぐことなく祈り続ける女性の姿が、母の姿を彷彿させたのである。

そこで私は目覚めたときに、白昼の夢の中でその続きを作った。——母は、母の魂はまだ消え去っていない。母は冥土でずっと私を気にかけて見守っている。私の眺めるものが冥土で母と出会ったときに、母はようやく安心して、あらたにほかの場所に生まれ変わる。魂の訴えるところに生まれ変わるのだ。

「私の眺めるもの」とは何か。「わたしは紙とペンで雑誌や新聞に何とか切り開いた道は、決して母が見つけて欲しいと望んだ道ではなかったのだ」（『わたしと地壇』）という確信からすれば、むしろそれは彼の世俗的な成功ではない。史鉄生が目指してきた方向性に沿えば、前節で挙げた「（エクリチュールが最終的に求める）魂の最初の展望」であり、また3章で挙げた『病隙碎筆』での言葉、「私はいつも「最初存在」を眺めている」が自ずと想起されるのではないだろうか。つまり、史鉄生の考える「零度」が、「私が眺めるもの」であると言えよう。そして、これを「廟の思い出」の文脈に照らして考えれば、廟から聞こえてくる

“鐘の音”が導く、恐れを抱かずにはいられない「異なる場所」。その存在に対して正面から向き合う心情もまた、一つの「零度」ということになるのではなかろうか。

「ある夢にずっと悩み苦しんできた」という「私」の姿は、2章の『鐘声』でヒマワリの悪夢に目覚め「恐れ怯える」Bに通じる。Bの恐れは、父母の不在に端を発し祖父の死までを連想する、あの世との接点に起因する。すなわち、「廟の思い出」において幼い「私」が廟の“鐘の音”により、「異なる場所であることを、あるいは異なる場所へとつながっている」という印象を感じとったことによる恐れと同様であろう。『鐘声』ではその苦しみにBがいかに対応したかについては、ほかの様々な解決されない物語同様、明かされることはない⁽²⁰⁾。しかし、「廟の思い出」においては、その恐れに正面から向き合う「私」の姿が描かれる。それは、教会の「鐘の音」が自らを「のびやかな心情」で「零度」に向かわせるのと同様、廟の“鐘の音”も「この世には永遠に欠陥がある」ことを受け止めた上で、「零度」に向かわせる契機として史鉄生が咀嚼してきたことの率直な表明ではないだろうか。

おわりに

史鉄生作品における教会の「鐘の音」と廟の“鐘の音”の表現するものについて、いくつかの作品を取り上げて検討してきた。最後に、この二つの関係性を示す小品を紹介して、本論のまとめとしたい。

史鉄生は1994年に「故郷の胡同」⁽²¹⁾という散文を発表している。この1500字弱の短い文章は、まるで『記憶と印象』執筆のためのノートであったかのようにその内容に重なる部分が多い。特に後半は「廟の思い出」と構成もほぼ一致する。故郷の胡同にはどこでも廟があること、通った小学校がもと寺社であったこと、18歳で挿隊し3年が経ったときに、足が動かなくなって帰郷、胡同で工芸品に絵付けする仕事を見つけ、未来に希望を抱いたこと、そして、最後に「私」を心配する母がねむの木を植え、「私」は書くことを始めたが、その成果を見ることなく母が亡くなったことが描かれている。

その廟に関する部分には、このような記述が見られる。

およそどの胡同にもみな廟があった。僧侶は胡同をひっそりと歩き、廟へ戻ると静かに経を唱えた。その読経の声がするといつも夏の夜空に星が見えた。夢の中で私ははっきりと聞こえる鐘の音で目が覚めることもよくあって、午後の陽光が地上に落ちるときの振動音なのだろうかと思っていたが、何年も経ってからその正体を知った。現在のロシア大使館のある位置に、かつては東方正教会の教会があったのだが、私があの鐘の音と関連づけて考えたときには、すでに壊されていた。あのころは寺や廟の多くも消えてしまったり作り直されたりしていたのだ。

失われてしまった教会や廟への郷愁が感じられるこの文章からは、「私」の生活の中に廟から聞こえてくる読経の声や教会の「鐘の音」が身近に、また彼にとって両者がほぼ等価に存在していたことがうかがえる。その後、「廟の思い出」及び『記憶と印象』諸篇の執筆に際しては、史鉄生は「鐘の音」と「鐘の音」の印象を自らの記憶の中からつぶさに拾い集め、両者の音色を塗り分けたのである。はっきりと音色の違う二つの鐘の音は、しかし「廟の思い出」において相互に響き合い、絡み合い、複雑な物語を紡ぎ出している。

注

(1) 鄧曉芒『靈魂之旅——90年代文学的生存狀況』「九史鉄生：可能世界的筆記」（中国湖北出版社、1998年。邦訳は赤羽陽子・近藤直子・山口守『精神の歷程——中国文学の深層』つげ書房新社、2003年）、山口守「夜の対話からマイナー文学まで——史鉄生、ザシタワ、アーライ」（尾崎文昭編『『規範』からの離脱——中国同時代作家たちの探索』アジア理解講座5、山川出版社、2006年）参照。

(2) 栗山千香子「惜別——史鉄生の逝去を惜しむ中国文化界の声」（『中国現代文学』第7号、2011年5月）参照。

(3) 『病隙碎筆2』第5節（『天涯』第3期、2000年。使用テキストは『史鉄生作品全編』第8巻、人民文学出版社、2016年。『病隙碎筆』については、下掲注(14)参照）では「ある文章について、それがいかなる文体なのか見いだせなかったとしたら、それこそが散文だ。…小説

は？これまで小説を読み、やってきたことから考えて、散文に比べ虚構が多いというだけだ」という見解が見られる一方、「也説散文熱」（1993年著、『史鉄生作品全編』第7巻所収）では、「散」という字は自由であることを宣言しているのみならず、平易で親しみやすいということも保証している。（散文は）詩歌のように生まれ持って奇怪なものに頼ることはないし、また小説のように複雑な技巧も必要ない。重視するのは心情だ。散文は、実際どう書いてもいいし、何を書いてもいいし、誰が書いてもいいのだ。稚拙で素朴であればあるほど真情や透徹した見解が表現されるのだ」と述べている。

(4) 北京出版社、2004年。邦訳は栗山千香子訳『記憶と印象 胡同の回想』（平凡社、2013年）。なお、本論で『記憶と印象』を出典とする際の日本語訳は、栗山氏訳による。

(5) 栗山千香子「^{ベース}八子とK あるいは二つの「零度」——史鉄生『記憶と印象』における少年時代」（『季刊中国』117号、2014年夏季号）。

(6) 史鉄生にあっては「史実」と「記憶と印象」の対比が、「歴史」と「文学・芸術」の対比として語られているとも考えられ、作家の文学・芸術への信頼、切実さが各所に散見される。「人類の文化の継承とは、つまり（この）記憶のことを指すのだ。…しかしここには常にある種の悲哀がつきまとう。主流の文化は常に個人の独自性を隠滅してしまう。主流とは、幾万幾千もの心の平均値であり、最大公約数のようなものだ。詩人の西川が「歴史は少数の人間の偉大なる功績のみを記録し、その他の人びとの会話は沈黙させられる。」と言うごとくである。…芸術と文学は、この最大公約数にあらがひ、人類の豊富で多彩な記憶を保存し、人類が多機能の肉体の延長にとどまることのないように現れたのだ」（『病隙碎筆5』第17節）。「過ぎし日々とは、眠っていた老人がしだいに目覚め、嘆いているうちに少しずつ生氣を取り戻すようなものだ。だから歴史を疑わずにはいられない。それぞれの心情にしたがえば、歴史はもともと確定できるものではない。私は道々考えた。では文学が求める真実とは何だろう？歴史はお墨付きの經典という性格を免れがたい。文学はそれを補うものであり、したがって重んじるべきは沈黙する魂である。歴史は時間を軸として空間の真実を描くのが常道だ。芸術はそのような単純化に満足できない。だから、この世で演じられている劇の奥にある複雑さを見ようとし、普遍によって見過ごされた場所に行つて固有の心の動きをたずねようとするのだ」（『記憶と印象』第1部「故郷」）。

(7) 「<印象>のディスコース—史鉄生「鐘声」論」(『日本中国当代文学研究会会報』14号、2000年9月)、「<壁>のアボリア—1990年代史鉄生の文学をめぐって(附)史鉄生著作目録」(『中央大学論集』第27号、2006年3月)、「方法としての記憶と印象 史鉄生『記憶と印象』の情景」(『アジア遊学』94「中国現代文学の越境」、勉強出版、2006年12月)、上掲注(4)「解説」他参照。

(8) 上掲注(4)第1部第1編(原題は「輕輕地走与輕輕地来」)及び第2編(原題は「消逝的鐘声」)、初出は『上海文学』第7期、2001年。

(9) 『作家』第4期。邦訳は小谷一郎『現代中国文学選集3 史鉄生——我が遙かなる清平湾・他』(徳間書店、1987年)所収。

(10) 『鐘山』1990年3期。邦訳は、栗山千香子訳「鐘声」(『季刊中国現代小説』第51号、2000年)。

(11) 上掲注(7)栗山2000では、『鐘声』が作品に三つの時間軸を持ち、さまざまな物語が多層的に存在しながらも、この作品が「一つの物語のドラマを追うのではなく、<印象>が錯綜し交信し合う中で、さまざまな物語が浮かんで消え、そしてまた浮かぶ、その生成のドラマ、そしてその中を貫いて流れる何か、をこそ伝えようとしている」と分析する。

(12) 『鐘声』の6年後に発表された長編小説『務虚筆記』(『收穫』第1・2期、1996年)第6章「生日」では、「私」にとって世界が始まった日々の様々な記憶と印象が語られる中で、生まれて初めて聞いた教会の「鐘の音」について、「私は教会を目にし、鐘の音も耳にしたが、その教会と鐘の音は私の記憶の中ではずっと別個のものであり、何年も経ってはじめて、あのゆらめく鐘の音が私の印象の隅っこであの教会を探し当てたのだ」として、両者の結びつきがはっきりと認識されている。

(13) 上掲注(7)栗山2000。

(14) 「病隙碎筆」(『花城』第4期、1999年)、「病隙碎筆2」(『天涯』第3期、2000年)、「病隙碎筆3、4」(『天涯』第1期、2001年)、「病隙碎筆5」(『天涯』第4期、

2001年)、「病隙碎筆6」(『北京文学(精彩閱讀)』第12期、2001年)。以上は『病隙碎筆』として2002年、陝西師範大学出版社より出版。テキストは『史鉄生作品全編』第8巻による。また、『病隙碎筆』については上記注(1)山口論文も参照。

なお、史鉄生はこの作品執筆の前年に尿毒症を発症し、透析治療を開始する。「『透析室』に横たわり、真っ赤な鮮血が「透析器」の中で流れている——私の体から流れ出、再び私の体の中に戻ってくる——のを見ると、その時、私はいつも空で飛行機が必死にもがく音が聞こえるような気がして、神のシナリオではこの一幕がどのように描かれるのかと想像してみるのだ」(『病隙碎筆』第2節)という感覚が史鉄生の死生観に新たな一面を加えたであろうことは想像に難くない。

(15) 上掲注(1)山口論文。

(16) ゴッホのこのタイトルについては具体的にどの作品を指すのか判然としない。『わたしと地壇』の地壇や『鐘声』の小学校(旧寺院)に「老柏樹」すなわちイトスギが登場するなど、史鉄生の作品にはイトスギが散見されることもあり、ゴッホのこの「松の木」も「イトスギ」のことで、一連のイトスギを扱った作品、あるいは「星月夜」(1989)などを想定しているものと考えられる。

(17) 『鐘山』第1期、1988年。テキストは『史鉄生作品全編』第4巻による。

(18) 上掲注(4)第2部最終編。原題は「想念地壇」。初出は『天涯』第4期、2003年。

(19) 『我与地壇』(『上海文学』1991年第1期)。邦訳は千野拓政訳『わたしと地壇』(『季刊中国現代小説』第37号、1996年)。

(20) 上掲注(7)栗山2000参照。

(21) 原題は「故郷的胡同」。『史鉄生作品全編』第6巻に収録されるも発表雑誌は未詳。編集者との約束で、故郷の胡同について書いたと説明されている。